

# 編集実行委員会便り

## 〈e-mail討論について〉

1月号発行の直前に、討論者のご賛同と編集実行委員会の承諾を得て、本会としては異例の本文記事のインターネット公開を冊子発行と同時に実現することができました。インターネットの効果はやはり絶大で、会員数(約2000名)をはるかに超える世間一般の皆様にご覧いただき、大きな反響が寄せられました。Google等で検索しても、おびただしい数のサイトで紹介、引用、コメントがなされています。それらのコメントの中には、企画者の意図を必ずしも適切に汲み取っていただいていないようなものも見受けられますが、ともあれ地球温暖化の科学につき多くの関心を喚起でき、また貴重な情報を中立的に提供できたことにより嬉しく思います。3月号では1月号で積み残した議論を掲載し、今後まだまだ議論は出て来る可能性はあるものの、ひとまずこの段階でe-mail討論を閉じさせていただきます。

## 〈特集について〉

“Sustainable Development”という言葉は比較的新しい。「持続可能な開発」の和訳で用いられているこの語句は、環境と開発に関する世界委員会の1987年報告書(“Our Common Future”)の中心的概念として示され、「将来の世代の欲求を満たしつつ、現在の世代の欲求も満足させるような開発」を意味するとされる。“Development”が「開発」と訳されることが多かったこともあり、食糧や天然資源を対象とし、これらをいかにして持続的に取得することができるかに当初は主な焦点があてられてきたように思う。Hotellingの定理やHerman Dalyの3原則などはこれらに対する解を示唆する古典的な洞察といえよう。最近では“Development”が「発展」と訳されて、「持続可能な発展」という和訳が多用されている。地球環境問題の顕在化とあいまって、その意味する対象も広がり、世代間の公平性ばかりでなく、経済と環境を両立した途上国の発展という文脈でも用いられることも多くなった。

日本語としても近年定着しつつある「サステナビリティ」という言葉は、そのような背景から、必然的に非常に広範な背景において用いられているといえる。今回の特集企画の「サステナビリティ学の創生」では、学問としてのサステナビリティを採り上げた。Integrated Research System for Sustainability Science (IR3S)を研究拠点として立ち上がったサステナビリティ学の包含す

きます。

前号発行から今日(2月20日)までの間で、世界ではいいことがあまり起こっていませんが、その中にあってひときわ感動を与えてくれたのは1月15日に起きたUS Airways 1549便の“Miracle on the Hudson”でした。そのSullenberger機長の言葉“We were simply doing the job we were trained to do.”はプロの厳しい姿勢を象徴するものとしてさらなる感動を与えてくれました。公益性が求められる学会誌の編集に際しては、“We were simply doing the job we were required to do.”と言えようようにしたいと願う次第です。

吉田 英生  
(京都大学大学院工学研究科航空宇宙工学専攻教授)  
E-mail: yoshida@mbox.kudpc.kyoto-u.ac.jp

る内容は極めて幅広いが、それがどのような学問であるのかが本特集を通じて多くの方に伝われば幸いである。機械や化学といった伝統的な学問分野が、目的を達成するための手段がその名になっているのに対して、サステナビリティ学は目的自体が名称に表れている。しかしその英語表記がSustainability scienceであるように、目的達成のための手段としては、伝統的な学問としてのscienceの各分野を取り込んでいる。と同時に、サステナビリティの観点から様々な学問分野をコーディネートすることが不可欠であり、必然的にサステナビリティ学は学際的な意味合いを持つことになる。

世の中に目を向ければ、1年後に迫ったバンクーバーオリンピックは経済、環境、社会、生活など6つの項目に対してサステナブルな大会を目指すことを掲げている。このように一般の人々の生活にサステナビリティという概念が定着しつつあることは喜ばしいことであると同時に、サステナビリティとは何かを改めて考えるきっかけにもなる。サステナビリティ学の今後の発展に期待したい。

最後に、ご多忙の中原稿をご執筆頂いた方々に心より御礼を申し上げます。

吉田 好 邦  
(東京大学大学院新領域創成科学研究科准教授)